

■ 目 次

ページ

幹事会	1
特別講演会	街路の無電柱化が景観の心理的評価に及ぼす影響 (西名大作氏)	2
都市計画研究会①	歴史的街並み・建築とまちづくり (シリーズ第2回) (橋本清勇氏, 内山健氏)	3
都市計画研究会②	歴史的街並み・建築とまちづくり (シリーズ第3回) (渋谷俊彦氏)	4
都市計画サロン・本編	相馬市への派遣職員からの被災地支援活動報告 (福馬晶子氏)	5
都市計画サロン・追記	福馬が広島から福島の相馬に行っている報告 (福馬晶子氏)	6
支部助成事業	シンポジウム「甦った出雲でこれからのまちづくりを語ろう！」(森山昌幸氏)	7
ホットコーナー	建築遺産をよみがえらせる力 (佐藤俊雄氏)	8
会員紹介	谷本圭志氏、倉内慎也氏.....	9
今後の活動予定	10
編集後記	10

■ 第2回幹事会報告 ■■■■■■■■■■

1. 日時

平成25 (2013) 年7月27日(土)

13:30~15:20

2. 場所

広島県情報プラザ 視聴覚研修室

3. 会議の概要及び議決の結果

議題1 各委員会の活動状況と予定について

- 各委員会の委員長又は副委員長より、順次、活動状況と予定について説明。
- 藤岡総務委員長より、総務委員会について報告。
- 篠部学術委員会副委員長より、学術委員会について報告。学術講演会については、12月上旬を予定し、広島市で検討中のサッカースタジアム検討協議会の方に、スポーツと都市づくりについて講演して頂くことも検討している旨の説明。
- 山下企画・研究委員長より、企画・研究委員会について報告。10月5日開催予定の第2回都市計画研究会について紹介。
- 研究交流委員会については、藤岡総務委員長が代理で説明。自主研究会支援については、募集期間内の応募が無かったことを踏まえ、次年度は、既認定団体であっても助成金の支給対象であることを再度提示し、応募を促すこととする。
- 上記に関し、幹事会としての承認を得る。

議題2 支部内規の整理について

- 藤岡総務委員長より、内規(案)見直しの主な点について説明。
- 8月末頃を目処に、メール幹事会で意見を頂き、とり

まとめる。現在、未定稿として運用しているが、とりまとめ後は、施行日を記入し、正式に運用する。

- 支部内規は、支部HPに掲載し、公開するものとする。
- 上記に関し、幹事会としての承認を得る。

議題3 2014年度日本都市計画学会学術研究論文発表会(全国大会)への対応について

- 高井支部長より、支部実行委員会(仮称)委員(案)について説明。
- 三浦浩之副委員長、藤原章正委員及び橋本清勇委員の所属を訂正後、電子メールにて幹事へ配信する。
- 上記に関し、幹事会としての承認を得る。

その他

- 藤岡総務委員長から、企画・研究委員会委員1名の退任について報告。また、後日、委員の所属の異動などについて、各委員長に照会する旨の説明。
- 高井支部長より、6月28日に開催された第1回支部長連絡会の概要について支部長連絡会資料により、説明。
 - ・学会員数が減少しており、増員を図ってほしい。
 - ・11月開催予定の会長アドバイザー会議への出席をお願いしたい。
 - ・公募期間を8月5日から10月11日とする研究交流組織公募への応募申請をお願いしたい。
 - ・次回理事会は、9月27日(金)12時から開催予定。

(文責：長谷山 弘志)

■中国四国支部地域助成事業■■■■■■■■■■

事業名：シンポジウム「甦った出雲でこれからのまちづくりを語ろう！」
日時：平成 25 年 7 月 19 日(金) 13:30~17:00
場所：大社文化プレイスうらら館
主催：(公益社団) 日本都市計画学会中国四国支部
共催：島根県／出雲市／(社) 島根県測量設計業協会
 島根県技術士会
参加者：48 名

1. はじめに

出雲大社では 60 年に一度の大遷宮が行われており、大勢の観光客であふれている。この大遷宮にあわせて整備が進められた出雲大社へのメイン参詣道である神門通りでは、ハード事業とソフト事業が功を奏し、かつての賑わいが復活しヒトがあふれる空間が形成された。このような出雲大社周辺における取り組みを他地域の参考にしていただくとともに、地域外の先進的な取り組みを今後の出雲におけるまちづくりや交通対策などに生かすことが重要である。

本シンポジウムは、全国でまちなみの景観をデザインしている神門通りのデザイナー、北海道の都市計画の実務者・研究者を招き、島根県や中国四国の技術者・研究者・一般市民との議論を行うことを目的として開催した。

2. 第 1 部「神門通りのにぎわいづくりについて」

はじめに、神門通り整備の実施主体を代表して黒田耕一氏(島根県土木部出雲県土整備事務所所長)より開会あいさつの後、第 1 部「神門通りのにぎわいづくりについて」というテーマで 3 名からの発表を行った。

小野寺康氏(小野寺康都市設計事務所)より、神門通りのデザイン計画についての説明がなされた。当該路線の石畳舗装は、デザインワークショップにより沿線住民と協働で検討されたものであり、シェアド・スペース(共有空間)としての整備効果を高めるために、車道部分に歩道部分と同じ石畳パターンを滲み出させるデザインとしている。このことにより、自動車の走行速度低減や歩行者の安全性向上の効果が大きくなっているとの説明があった。

南雲勝志氏(ナグモデザイン事務所)からは、神門通りの照明、信号機、ポラード等の付帯設備のデザインについての説明があった。特にオリジナルデザインの照明柱は、石畳や沿道店舗の景観ともマッチし、昼夜ともに通りの景観形成の重要な要素となっている。

原哲也氏(出雲市役所元観光交流推進課)からは、ハード整備にあわせたソフト施策としての観光モビリティ・マネジメントの説明があった。具体的には、石畳の裏面へのメッセージ記入イベントによる満足度向上施策や、コミュニケーションアンケートによって滞在時間増、消費金額増、立寄りスポット数増につながっているとの紹介があった。



3. 第 2 部「平成の北前船トーク～北海道と出雲のご縁を結ぶ～」

第 2 部は、地元から北前船寄港地であった鶴鷺(うさぎ)地区の地域づくり実践、および北海道における地域づくりをそれぞれ紹介する形式で 3 名からの発表を行った。

清水隆矢氏(地域代表)からは、高齢化率 60%を超える鶴鷺地区での地域づくり活動の報告があった。古民家を活用したカフェや宿泊施設、漁船によるクルージングなどの取り組みを行っており、近年では UI ターン者が増加しているとの報告があった。

安江哲氏(ドーコンモビリティデザイン)は北海道から

参画していただき、札幌市内で取り組んでいるサイクルシェア「ポロクル」の紹介がなされた。全国各地で実施



されているサイクルシェアリング(コミュニティサイクル)では、多くの場合に行政からの補助によって運営されている。しかし、ポロクルは厳しい条件の中で自社による運営を行っているとともに、札幌市内の交通環境改善と魅力向上に寄与していることが確認できた。また、ポロクルの自転車は、前述の南雲勝志氏がデザインしており、その考え方のポイントやこだわりの説明があった。

林美香子氏(慶應義塾大学特任教授、北海道大学客員教授)も北海道から参画いただき、自身の研究テーマである「農都共生」に関する発表がなされた。農家と都市住民が農村のコミュニティビジネス(農業の 6 次産業化、マルシェ、農家レストラン、民泊、教育イベントなど)を通じて共生することで、双方にメリットがある地域活性化を実現することが可能になるとの内容を数多くの実践事例を交えて発表された。

4. 第 3 部「フリーディスカッション」

第 3 部は発表者全員が会場前面に並び、会場も交えてフリーディスカッションを行った。まちづくりや景観形成などの活発な議論が行われ、とりわけ北前船時代のように東京を経由しない北海道と島根の連携・交流について、様々な議論を行うことができた。本シンポジウムでは、昨年度に引き続き、山陰地方の一般市民や都市計画事業に関わる参加者が都市計画にふれあえる有意義な時間を持つことができた。



(文責：森山 昌幸)

■ホットコーナー 建築遺産をよみがえらせる力

昨年の夏頃から編集を開始し、平成 25 年 6 月に『よみがえる建築遺産』を出版することができた。中国地方のいくつかの都市を訪れた際、建築遺産のリノベーションの事例を見るにつけ、街への波及力を感じたのが、編集の動機である。

例えば、松江のカラコロ工房、岡山のルネスホール、ヒストリア宇部においては、それぞれ重厚な外観と歴史意匠が残され、それがイキイキと活用されていた。建物の中に入ると落ち着いた豊かな気分に入ることができるが、こうした力は何なのかということについて、とりまとめておきたかったのだ。私の知る事例は限られていたため、都市計画学会のメンバー等の情報を借り、つてをたどりながら事例を増やしていった。こうして中国地域の約 30 の事例が集まった。

改修された建築遺産が備える空間の豊かさと、そこに至る改修工事の工夫は、書き物としてのコアの部分である。さらに、建築遺産が残され改修されるに至った経緯と、それが現在どのように活用され地域に波及効果をもたらしているかまで、執筆領域を広げたため、都市計画の関係者が読んでも興味を持っていただけるものになったのではと思っている。30 の事例にはこうした「物語」が詰まっている。

あまり知られていないと思われる事例の一つ紹介しておこう。周南市は山口県下の工業都市である。コンビナートに隣接する市街地に、「旧日下医院」はある。地図で確認しないと見落としてしまいそうなたたずまいで、それは立地している。セメントモルタル仕上げの外装はややくすんでいるが、よく見ると随所に歴史的な意匠がある。上下の窓の間の壁（スパンドレル）には、矩形を組み合わせたシンプルなデザインのレリーフがある。長方形のモールディング付きのコーニス（軒）、その下部と二階窓上部のアーチ内には、デンティル（直方体の突起物が連続する意匠）が配置されている。わざと荒く仕上げられたスペイン壁には窓枠に沿って、人造石洗い出しの縦ラインがあり壁面を分節している。ファサードに施されたこのような意匠は、当時世界的に流行していたアールデコの特徴だ。

さらに玄関ポーチの丸い石柱と玄関上部のギリシャ建築に由来するペディメントが、医院としての威厳をこの建物に与えている。

内部は花屋さん、カフェ、2 軒の雑貨店という小さな商業施設に生まれ変わっている。それらはいずれもユニークなお店だ。カフェでは静かな落ち着きを感じることができる。雑貨店はいずれもデザイン性の高い文具、食器、日用雑貨を扱っており、ギャラリーのようだ。若い女性や中年のカップル・グループで賑わっている。



内装が白でまとめられた明るい空間のカフェは元は薬局



かつての診察、処置室も雑貨店に生まれ変わり、思い入れの商品が陳列されている

この建物、老朽化が市民の目にも明らかになり、取り壊しを防ぐための市民運動が展開されたという。しかしその運動は日の目を見なかった。建物のシンボル性は認められても、何の目的で、どの事業主体が、どのように資金を投じて残すかという点は、どのリノベーション事例でも問われる壁である。幸い、4 人の商業者たちの熱意により、残り活用することで所有者と合意がとれ、今日の姿になっているのは、僥倖であった。地域の宝として今後も小さな改修を続けながら、人々に親しまれていくことを心から期待するものである。

建築物が時の経過とともに老朽化するのは必然であり、今後も増え続ける建築遺産にどのように向き合うのかが問われてくる。大規模でシンボル性のある建物は公共の力で何とか残せてきたが、地方自治体の体力も低下してきているので今後はどうなるのか。小規模な建物には救い手としての公共の力はなかなか及ばないかと懸念する。やや乱暴な言い方かもしれないが、今後の建築遺産の保存とその活用は、これまで以上に「民」の力で担われていくことになるのではと感じる。『よみがえる建築遺産』では担い手としての「民」の姿をいくつか紹介することができたのは、幸運であった。

(文責 公益社団法人中国地方総合研究センター佐藤俊雄)



